

# 令和6年度被災収蔵品尚育王首里八景詩書帖復元試作業務 尚育王筆「首里八景詩」書帖復元試作報告

鶴田大<sup>1</sup>、幸喜洋人<sup>2</sup>

はじめに

本作品は一般財団法人沖縄美ら島財団所蔵尚育王筆「首里八景詩」である。令和6年5月1日から令和7年3月31日まで書家の幸喜洋人氏によって修理が行われた。修理にあたり担当職員を鶴田大が担った。

## 【1\_復元模写の概要】※首里八景詩書帖の画像

昨年度までの尚育王書跡復元業務（対句幅、七絶幅）に続く業務。これまでの尚育王書跡の調査・復元製作の成果を踏まえて業務をおこなう。ただし、これまでの大書と異なり、比較的小さな文字による帖であるため、復元製作技法・道具類などの再考が必要となる。また文字数も七言絶句八首ということで二百三十六文字（署名を含む）に上る。各文字の造形・筆致を憶え込んでから本製作に臨む必要があるため、今年度は試作製作とし、次年度の本製作に備えることとなった（図1-1～1-6）。

尚育王自筆『首里八景詩』書帖（原本；2019年の首里城火災により焼失）



図1-1 表紙



図1-2 裏表紙

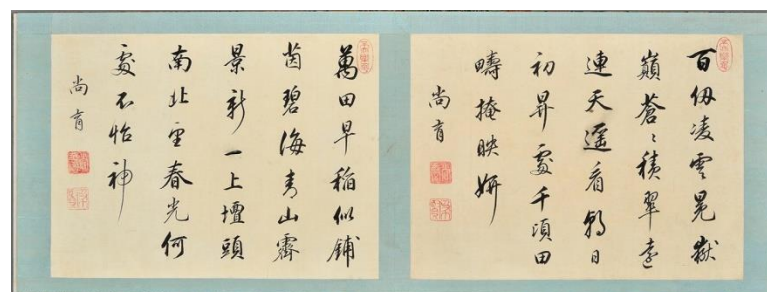


図1-3 尚育王自筆『首里八景詩』書帖 1-2頁

<sup>1</sup>一般財団法人 沖縄美ら島財団 総合研究所 琉球文化財研究室 研究員

<sup>2</sup>書家・・・令和5年度沖縄美ら島財団 所蔵 尚育王筆「地静春」対句 復元製作

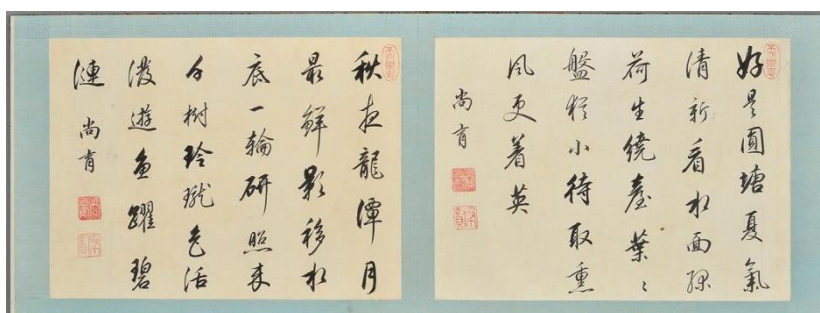


图 1-4 尚育王自筆『首里八景詩』書帖 3-4 頁

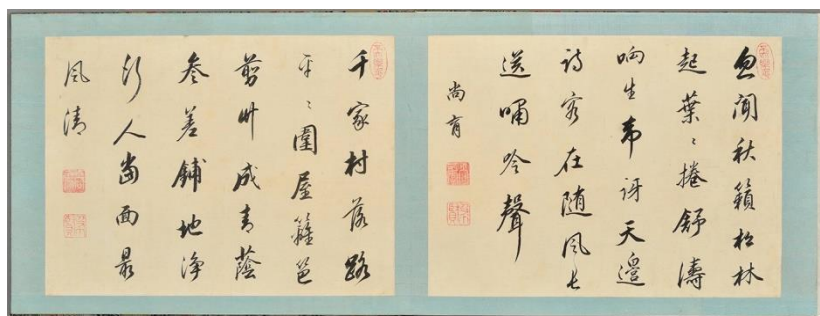


图 1-5 尚育王自筆『首里八景詩』書帖 5-6 頁



图 1-6 尚育王自筆『首里八景詩』書帖 7-8 頁

## 【2\_復元模写の技法について】

基本的な復元模写の技法としては、これまで通りに、原本（焼失）の原寸コピーを横に置いて行なう伝統的な臨書技法となる。ただし複写機による精確なコピーを活用して、用紙(料紙)の下に原本原寸コピーを置く敷き写し技法（嚮搦）も併用し、より精巧な復元模写を目指す（図2）。

また前回までの大書においては、やはり伝統的な双鉤填墨法（籠字法）と臨書技法を適宜用いたが、細字においては双鉤填墨法による輪郭部分の墨色の変化・違和感が目立つため、もっぱら臨書技法によることとした。

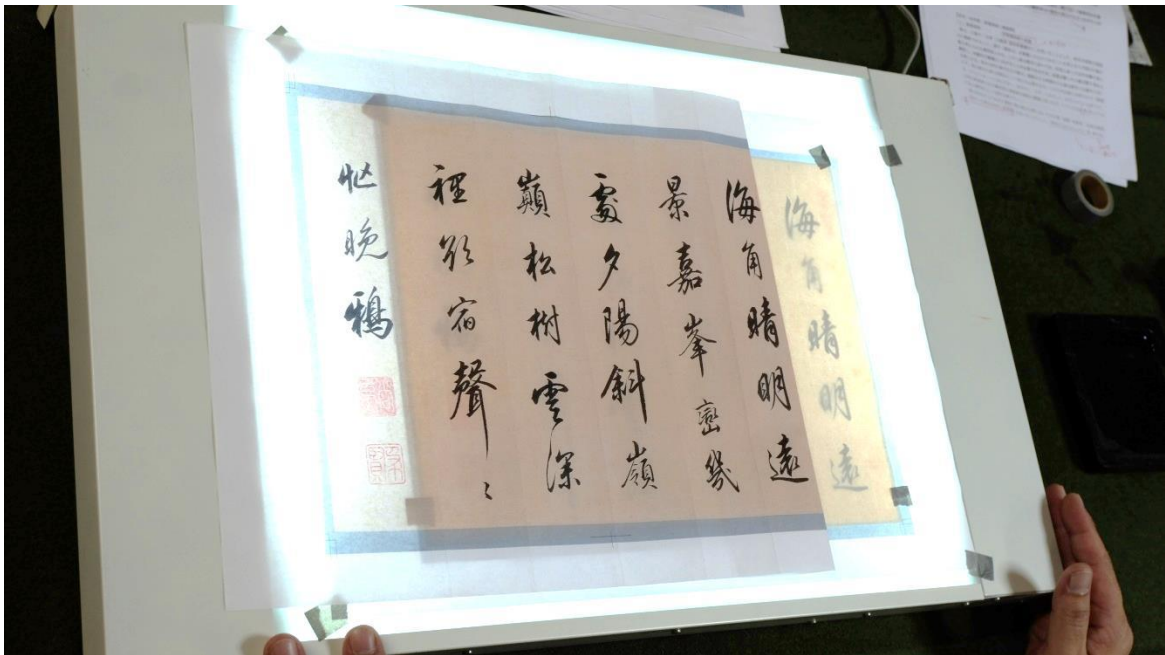


図2 臨書技法と敷き写し技法（嚮搦）を併用しての復元模写

### 【3\_道具・材料類：筆墨硯紙と機器類】

#### (1) 筆墨硯紙・・・ ※筆墨硯紙の画像

筆は、小筆の「玉章（文魁堂 愛知県豊橋市）」を用いることとした。原本が琉球王国国王の書跡であること、漢字（漢詩文）を揮毫したものであることを考えると中国の小筆が最も考えられる選択肢となる。しかし復元模写においては、非常に多くの文字を繰り返し練習し、本製作の揮毫につなげることが必要であるため、品質が整った小筆が数十本以上必要となる。原本当時の筆や仿古の筆は、価格からも特質からも復元模写には適当とはいえず、復元模写の筆は消耗品として捉える必要がある。このため品質に定評のある「豊橋筆」を中心に多くの小筆を試筆し、最終的に「玉章」に決定した（図 3、4）。尚育王対句・七絶では、古式の紙巻筆である攀桂堂の雀頭筆を細部の補筆に用いたが、こうした仿古筆については今後も選択肢として検討は続けたい。



図3 使うこととした筆・墨と試し書き



図4 試行した古墨・仿古墨

墨は前回までの尚育王書跡の復元模写の際に用いた仿古墨「御製 珍寶墨 含經堂藏墨」（清末～中華民国時代 油煙墨）を用いることとした。「詹奎元（せんけいげん）製 萬年枝」など他の仿古墨によっても試筆したが、やはり原資料に近い墨色・質感は「御製 珍寶墨 含經堂藏墨」が原本にもっとも近い雰囲気になった。原本の墨についても、今

回用いる仿古墨と同様に油煙墨であったとみられる。

硯は小振りの和硯（産地未詳）を用いることとした。尚育王対句・七絶の復元模写においては多くの墨液を用いる必要から大振りの端溪太史硯を用いたが、今回は墨液の量が少ないので小振りの硯が適している。また、淡墨の書作品や水墨画などでは、硯の影響が大きいですが、原本のような濃墨であれば、硯の産地について慎重な検討を加える必要がないため、小筆を用いて墨色の一貫性をコントロールでき、使いやすい小振りの和硯を用いる（図5）。

用紙（料紙）については、原本が紙本か絹本かの情報が残されていなかった。このため画像による判断に頼ることとなった。墨が載っている部分をつぶさにみていくと、紙本特有の横向きの簀子目が確認できた。このため原本は紙本であると判断した。また紙本の材質の詳細については、同じく原本の画像を元に、中国の仿古紙（商品名「熟宣仿古箋 半切」）を用いることとした。原本の料紙は紙繊維の生成りの色合いが残っており、かつ墨の滲みが殆どみられない。このため同様に生成りの色合いの、滲み止めの施されている熟紙を用いることとした（図6）。「熟宣」とあることから青檀に藁を交ぜて漉いた宣紙の一種とみられるが、こうした紙の材料・製法の詳細を突き止めることは難しい（図7）。本製作の際の料紙が決まったら、それについては高知県立紙産業技術センター等に依頼して材料分析をおこないたい。

今年度は試筆を繰り返しながら、本製作の料紙についても検討を続けたい。



図5 小振りの和硯（無銘）を使う



図6 仿古紙（主材料は青檀か）を使う

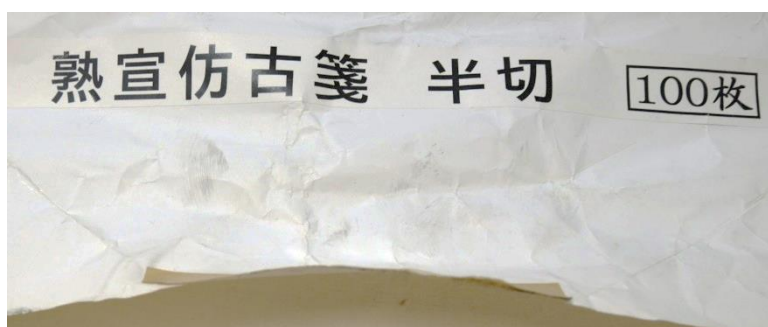


図7 仿古紙の商品名。材料・製法の詳細確認は困難。

(2) 透過光ライトボックス・・・

臨写法による福毛模写において補助的に用いる（原本原寸コピーを用いた）敷き写し技法においては、透過光ライトボックスが必要となる。伝統的には原本を下に敷いて薄用の料紙に書き写すが、復元模写においては原本に近い厚手の料紙を用いる必要があり、敷き写し用の薄い料紙を用いることができない。このため、復元模写においては透過光ライトボックスを用いるのが現実的といえる。

今回の復元模写においても尚育王対句・七絶の復元模写と同じ透過光ライトボックス（※通常の市販製品）を用いることとした（図8）。



図8 敷き写しに用いるライトボックス

#### 【4\_模写の工程】

##### (1) 試し書き・・・

筆墨硯紙および、その他の機材類を決めると、それらを適切に設置し試し書きを進める。墨を磨り、筆になじませて原本の文字を書き写す。

①墨を磨る～②筆に墨をなじませる～③文字を写す という工程を、**墨色を安定させつつできるようになるまで**繰り返す（図9～11）。

[画像] 墨をおろし、筆になじませ、墨色の調子を整える



図9 ①墨をおろす様子

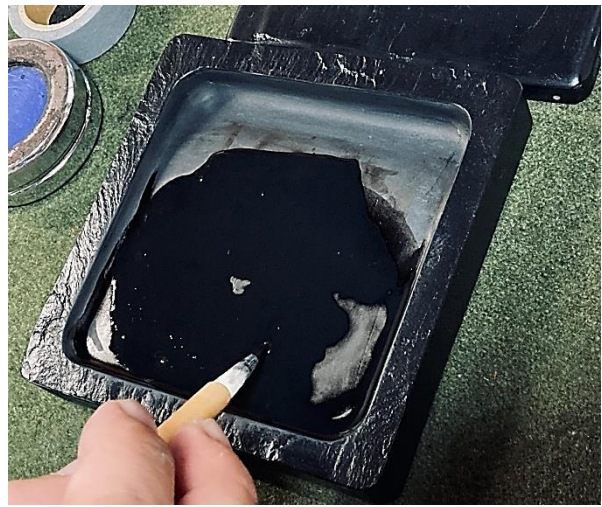


図10 ②筆に墨をなじませる



図11-1 ③墨の調子を整える



図11-2 ③



図11-3 ③

試し書きでは、筆墨硯紙の調子を安定的にコントロールできることを目指すが、同時に原本の文字の造形性を憶えるという意味もある。「首里八景詩」は七言絶句が八首あり、本文が 224 文字あり、加えて署名（6 紙分 12 文字）がある。八首八枚で都合 236 文字となる。これらの一文字一文字の造形を憶え、文字間のつながりを把握していく。一文字を書き損じたら一枚が反古となるので、文字の造形と文字間のつながりをきちんと把握・記憶していることが試作・本製作の準備としては必須となる。

復元模写の揮毫においては、原本の文字の筆線の中心（重心）を最初になぞり、そこに加筆して肉付けをおこなう。形を写しつつ、墨の濃淡・筆勢も同時に写していく。墨が乾いた際には、揮毫当初とは異なる表情が現れるため、そうした変化も念頭に揮毫をおこなう。

本来の臨書には、一般に、臨書を通して原本の書風を自分のものとし、自らの書風を高める、という意味合いがあり、書家自身の書風が臨書作品に反映されることを望ましいとみる考えがある。しかし復元模写においては書家自身の書風は消して、原本の書風の復元に専念しなければならない。このため復元模写の試し書きは、自分の書風を消して原本の書風に専念していく過程でもある。

試し書きを通して、原本の揮毫の様子を把握していく必要もある。八首の七言絶句をどの順番で揮毫したか。一息で同じときにすべてを揮毫したのか。それとも日にちを開けて何度も揮毫して、その中からよく書けた八枚を選んだのか。墨色や筆致を比較しながら、どのように原本を揮毫したのかを推定していく。

## （2）試作・・・ ※揮毫作業の画像（クローズアップ、仕上がった一枚分、全八枚等）

今年度の目標は「首里八景詩書帖」の本紙試作（八首八枚の揮毫）である。試作までの試し書きを続けた結果、原本は同一の筆・墨・（硯・）紙を用いて、一続きの時間内に揮毫したものと判断されるに至った。このため試作においても同一の筆・墨・（硯・）紙を用いてひとつらなりの時間内にすべて八首八枚の揮毫をおこなうこととした。

試し書きの際に試筆した同種の小筆「玉章」の中から使いやすい数本を選ぶ（※使用に耐えない数本の筆は収める）。墨・硯および水滴を整えて、料紙も使用に耐えるものを入念に選ぶ。

一首一枚ごとに試筆を進める。途中で文字を書き損じたら、書きかけの一枚が丸ごと反古となるので、慎重に、しかし勢いをもって書き進める。どこまで一文字一文字の造形と、文字間のつながりを記憶しているかが問われる。一文字一文字を書き進めている際にはきちんと写せていると思っても、一枚を仕上げてみると全き復元模写ができていないと感じる箇所が散見される。これについては、そもそも全き復元模写は不可能に近いものであり、そこへ向けて限りなく近づくという以外には目標を設定できない。このことは尚育王対句・七絶においても痛感された部分である。明らかな書き損じは別とし

て、一枚を俯瞰してみたときにどこまで完成度の高い復元模写ができているか。また八枚を俯瞰できたときに一揃いの復元模写作品となりえているかを目標に製作をおこなうことになる。

あまりに形似にこだわると尚育王の書風（筆勢・筆致）が失われる。字形の復元と書風の復元は背馳する面があるがその両立が求められる。一枚の揮毫を終えるたびに一枚全体を俯瞰でみて、成否の判断をおこなう。さらに八枚の揮毫ができると全八枚を俯瞰でみて、成否の判断をおこなう。俯瞰でみると、字形は整っていても全体では統一感に欠けるもの、全体としては統一感があっても字形が整っていないもの、などが判然となる。

一文字一文字を書き続けることで一枚が仕上がり、一枚一枚を仕上げることで全八枚が仕上がった（図12、13）。

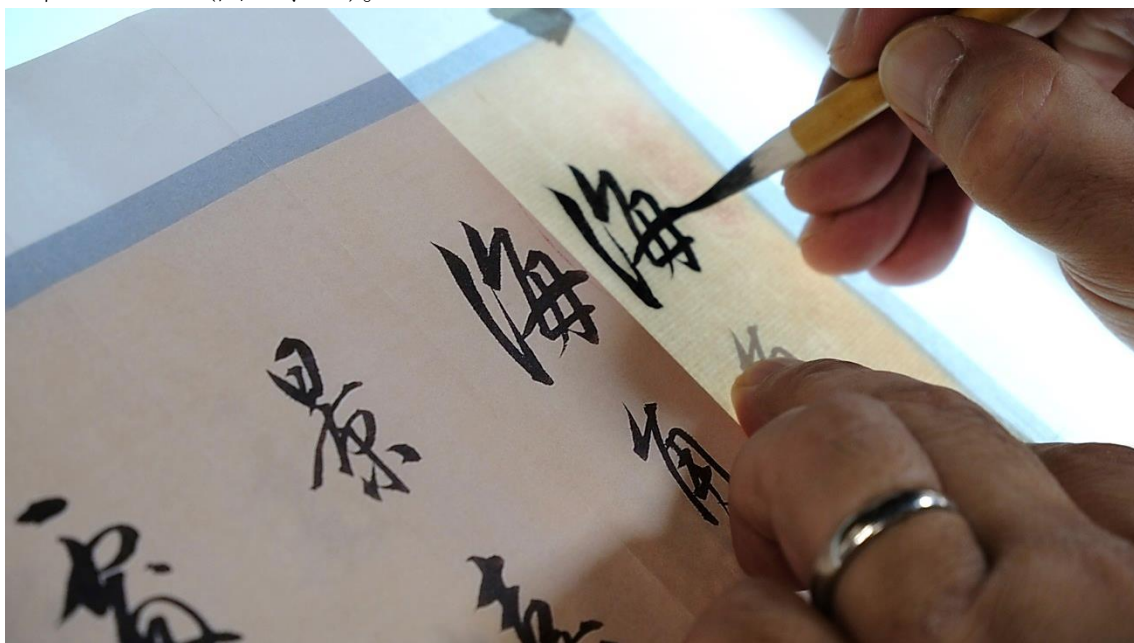


図12 臨書技法を主体に、敷き写し技法も補助的に用いて模写を進める



図 13-1 (左)

図 13-2 (右)

最初に筆線の中心（重心線）を写し、線の太さ・にじみ・かすれなどは必要に応じて書き加える  
【5\_試作を通してわかったことなど】

(1) 尚育王の書跡作品群における本作品の位置づけ・・・

※下記の①～④の作例の画像（図 14～16）

試作に取り組む以前から本作品（原本）が尚育王の書跡作品群において、もっともすぐれた作品という認識があったが、試作を仕上げ、そのことがあらためて痛感された。尚育王の書跡には大まかに①手習い的な作品、②鄭嘉訓の書風の影響の強い作品、③鄭元偉の書風の影響の強い作品、④その他 が考えられる。先に復元模写作品を制作した尚育王対句は①であり、尚育王七絶は②に該当している。本作品は鄭嘉訓風・鄭元偉風を脱した熟達の書風であり、④に属す名品として位置づけることができる。

製作年代ははっきりしないが、尚育王の晩年に当たる三十歳前後の作品ではないかとみられる。同じく④に属す作品としては尚育王千字文が考えられるが、本作と比較して、やや謹直な印象があり、自身の書風を自由に展開させたという意味では、本作品が現存作品中の白眉と云えるのではないか。

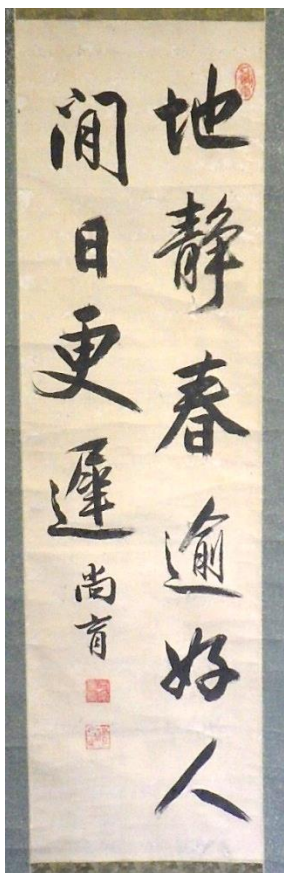


図 14 尚育書(対句)

手習い的とみられる。

〔美ら島財団旧蔵・焼失〕

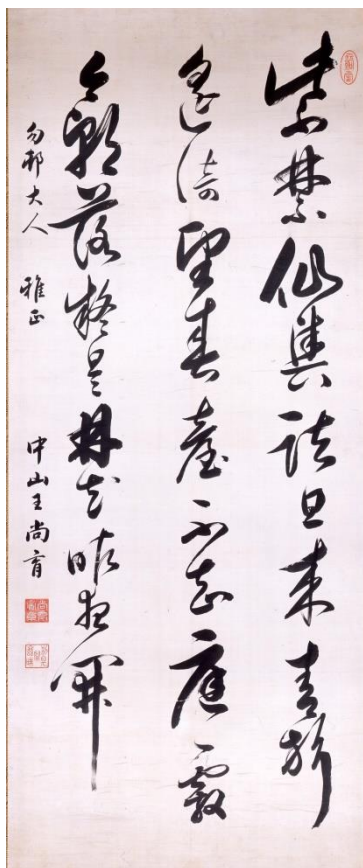


図 15 尚育書(「紫禁仙真」)

鄭嘉訓の影響が窺える書風。

〔美ら島財団旧蔵・焼失〕

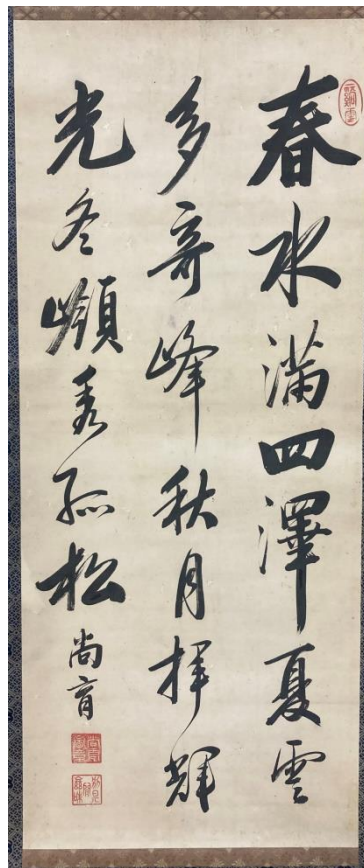


図 16 尚育書(「春水満四澤」)

鄭元偉の影響が窺える書風。

〔沖縄県立博物館・美術館蔵〕

(2) 書跡としての本作品の特色・・・

尚育王が書跡を習ったと考えられる同時代の書家、鄭嘉訓・鄭元偉には米芾の書風の影響が強いとみられている。たしかにそのようである。このため尚育王の書跡もまた米芾の書風の影響が全体的にうかがわれる。

他方で、今回試作をおこなった尚育王の書跡「首里八景詩」については、趙孟頫の影響が随所にみられることが、模写によって気づいた点である。たとえば技巧については、非常に細い線を効果的に用いて書跡全体の表現に豊かさを与えているなどの点が挙げられる。また字形については、「天」などの字形の類似、あるいは「連」「遙」などの「シンニョウ」の造形の類似などが目につく（図 17、18）。

米芾も趙孟頫も宋代の代表的な書家であり、琉球の書跡が宋代中国の書跡文化に大きな影響を受けていることは、あらためて注意すべき点だと考えられる。

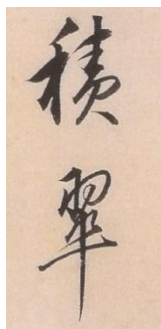


図 17-1

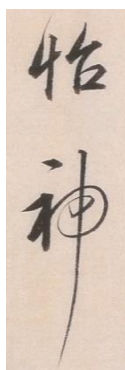


図 17-2

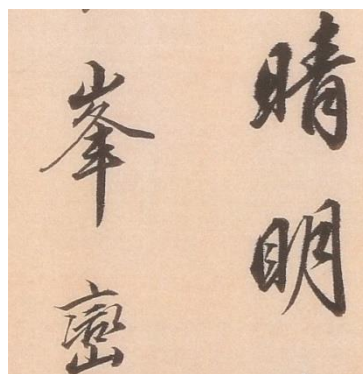


図 17-3

図 17 細い筆線の効果的な使用：「翠（左）」「神（中）」「峰（右）」（尚育王）



図 18 「水」（趙孟頫）



図 19-1 「天」(尚育王)

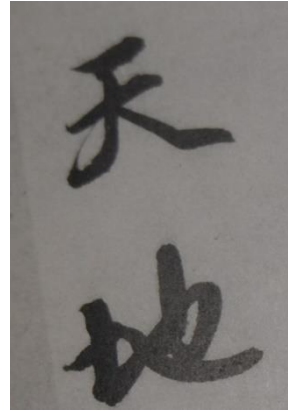


図 19-2 「天」(趙孟頫)

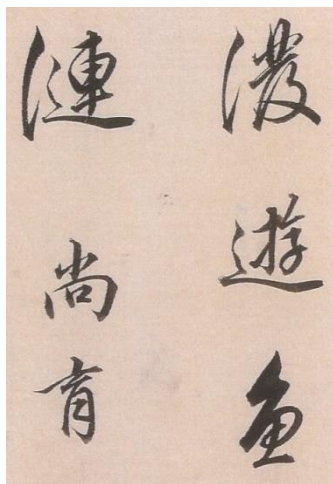


図 19-3 「遊」「漣」(尚育王)

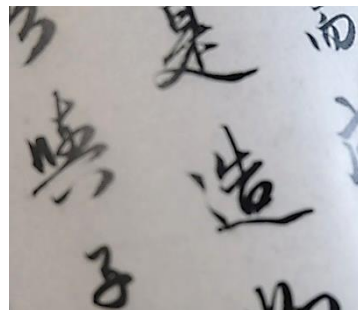


図 19-4 「造」(趙孟頫)

図 19 字形の類似：19-1 「天」、19-3 「遊」「漣」(尚育王) / 19-2 「天」、19-4 「造」(趙孟頫)

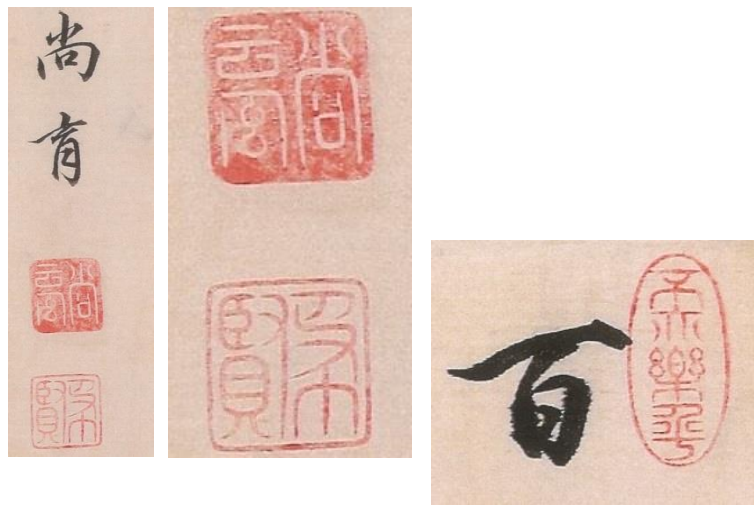
〔参考文献〕『中国法書選 趙孟頫』(二玄社)

【6\_本製作に必要な準備など】

(1) 印章について・・・

本作品（原本）の印章（三顆）は他に使用例の知られないものである。試作期間に同一の印章を使用した作例の調査をおこなったが、みつからなかった。このため印章については本作品の原寸画像から摸刻（復元製作）を行なうことになる。さいわい本作品（原本）の八枚のなかに各三顆の印影の鮮明な押印部分があるため、摸刻は可能と考えられる（図 20、21）。

印材については先の尚育王対句・尚育王七絶同様、石材を用いるのが穏当といえる。尚育王の印章は現存しておらず、情報も史資料には記述がみあたらない。印影からみて、木材・金属材の可能性はあまり考えられない。玉材の可能性はあるが、積極的に支持する要素はみあたらない。このため、印影からみて最も蓋然性の高い石材による摸刻が望ましい。



20-1 「尚育」

20-2 「希賢」

図 20 尚育王落款印

図 21 尚育王引首印「不亦楽乎」

(2) 料紙について・・・

試作を通して、今回用意した料紙（仿古紙）の質感で概ね穏当と考えられる。とはいえ、首里王府に関わる琉球の書跡・絵画で広く用いられた宣紙・竹紙を中心に料紙の検討は、科学調査を含めて今後も続けたい。滲み止めを施した熟紙という点は、今回使用した仿古紙（「熟宣仿古箋」）で穏当だったといえる。処々のニジミは、ドーサ引きが不十分だった可能性や、敢えてニジミを表現した可能性などが考えられる。さらに検討していきたい。

本紙の裏打ちについては、先の尚育王七絶（ヌメ・紕本）と異なり、一般的な熟紙であるため、揮毫後に施しても差支えないと思われる。最終的に決定した料紙の質感・薄さによっては揮毫前に裏打ちを施すよう検討を加える必要がある。

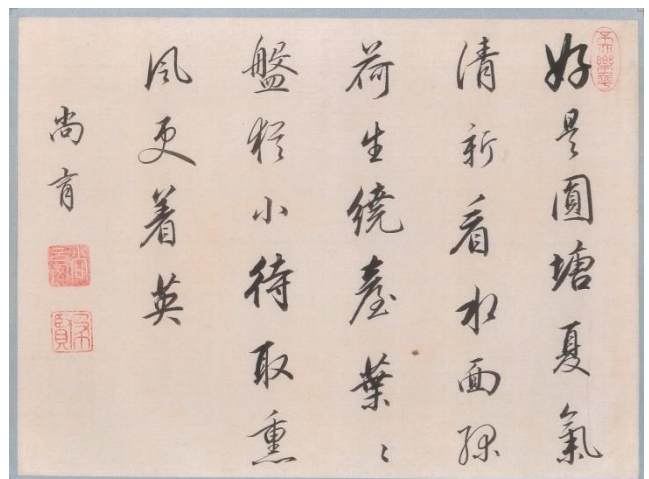
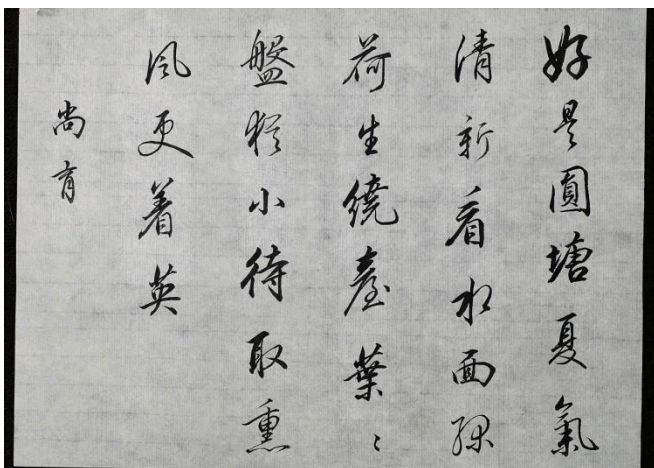
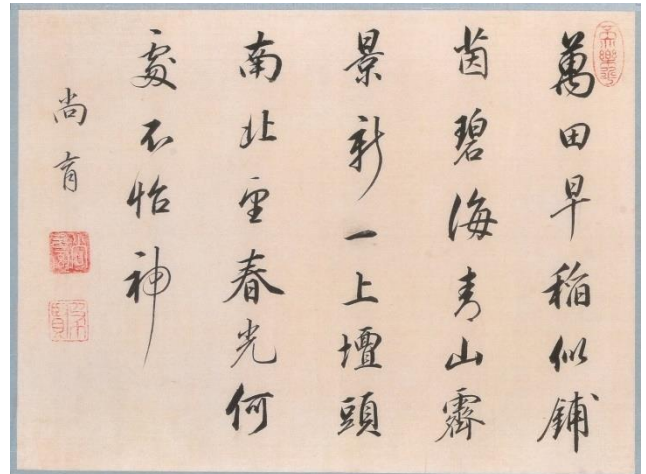
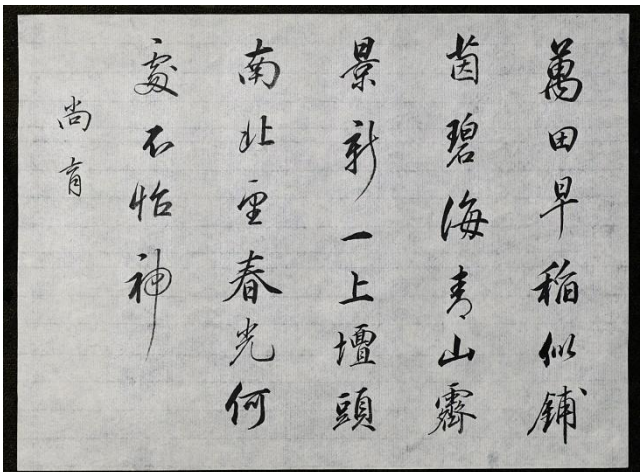
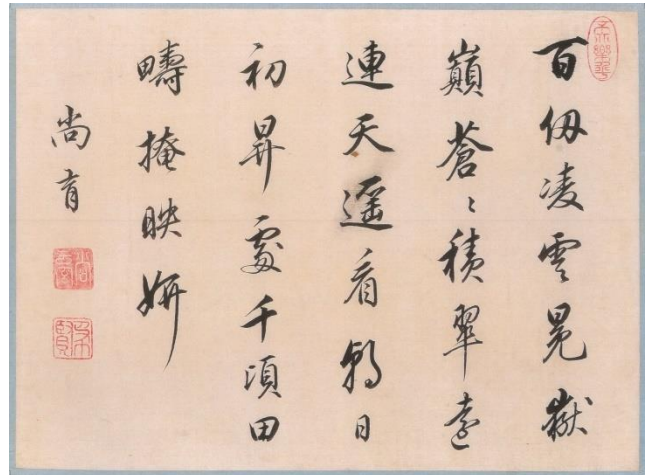
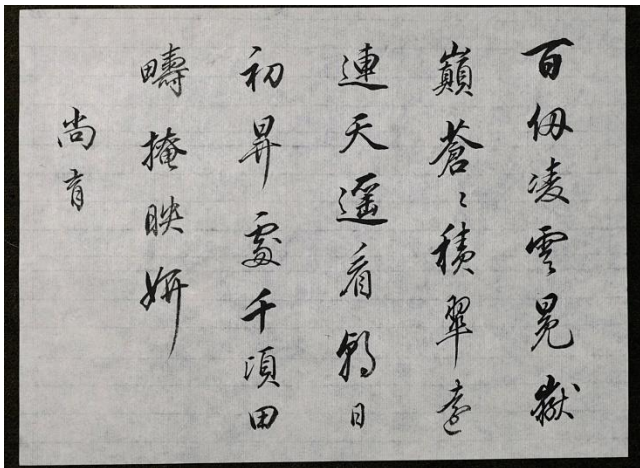
(3) その他・・・

尚育王時代に、どのような法帖が琉球の文人・書家の間で用いられていたかは明らかでないが、重要な点であり、調査を進めたい。

【7\_復元試作品 画像】

[画像] [左] 復元試作画像

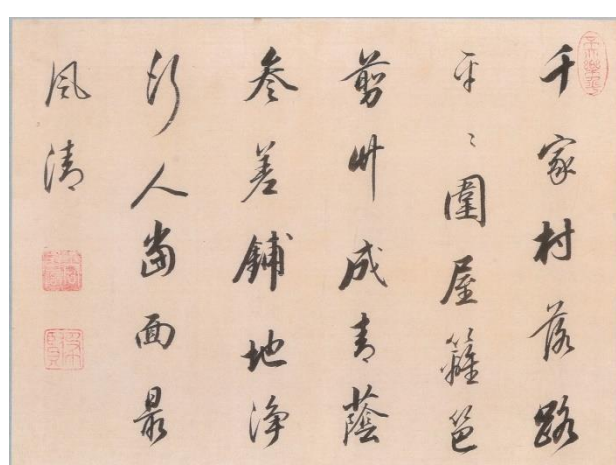
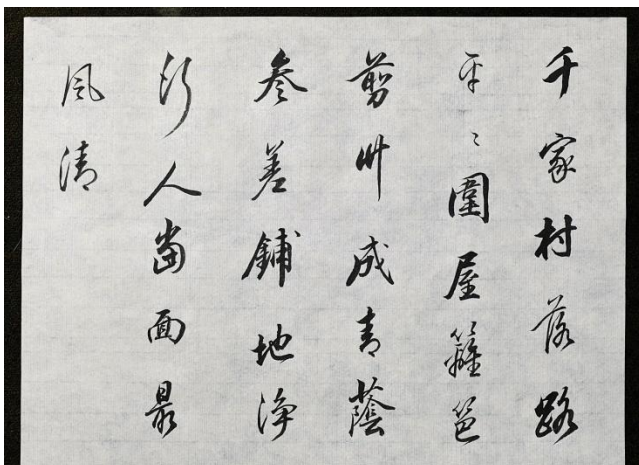
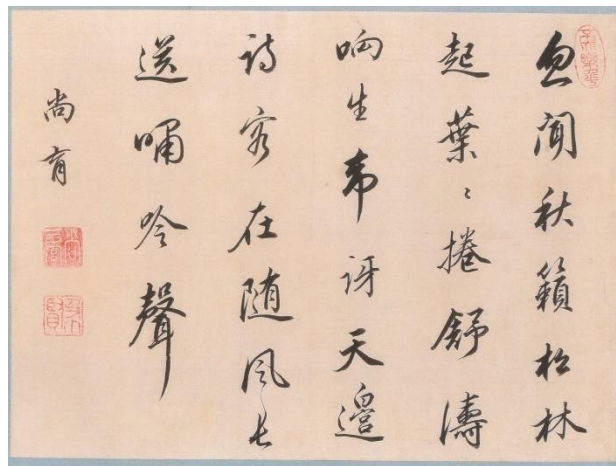
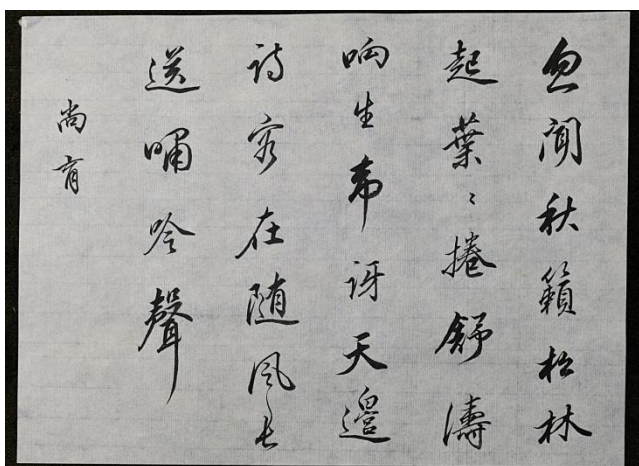
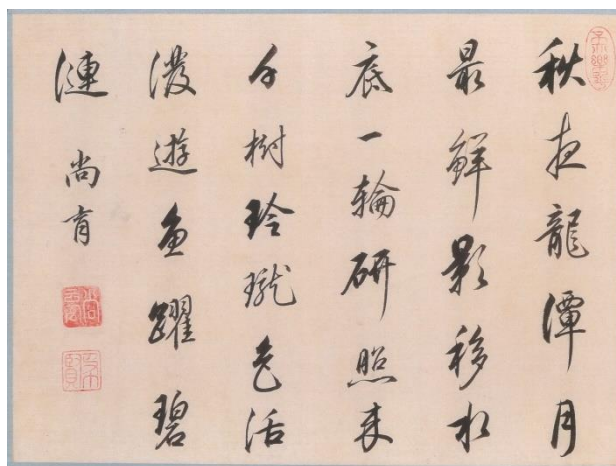
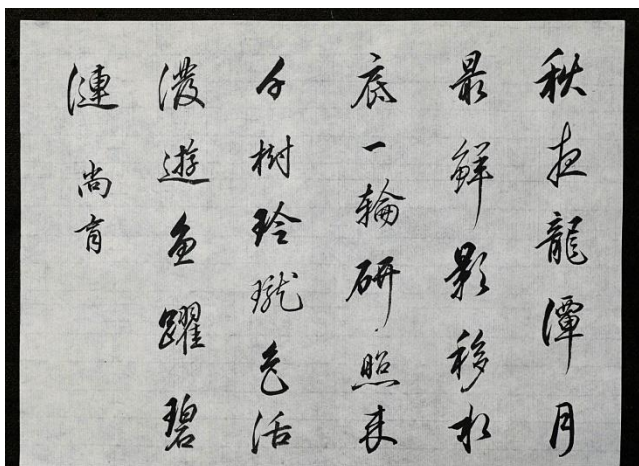
[右] 原本画像



(上から「一、冕嶽積翠」「二、零壇春晴」「三、経臺新荷」)

[画像(承前)] [左] 復元試作画像

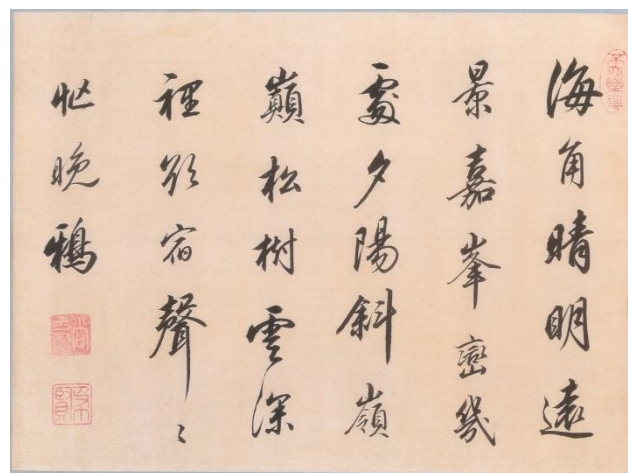
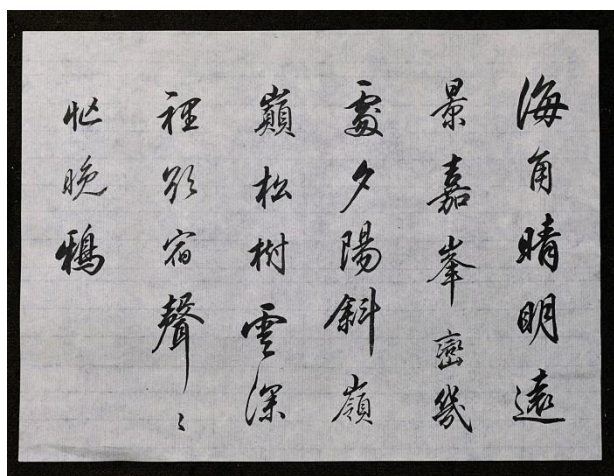
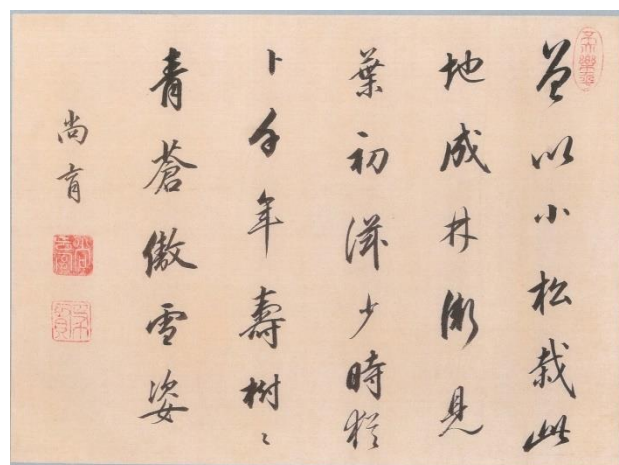
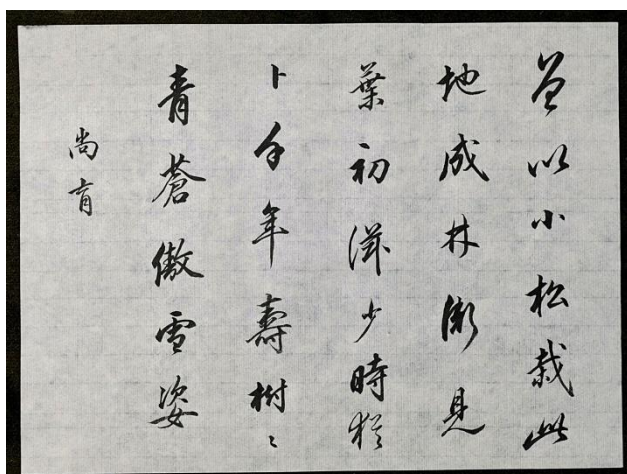
[右] 原本画像



(上から「四、龍潭夜月」「五、虎山松涛」「六、崎山竹籬」)

[画像(承前)] [左] 復元試作画像

[右] 原本画像



(上から「七、西森小松」「八、万歳嶺夕照」 以上、各八葉)